

る瑞にか侍らん、

〔平日閑話十二〕明和九年八月、當月末より紅梅梨櫻桃李の類ひ、花ひらく事春のごとし。上野山門際の櫻ことぐく開、尋常の歸り花に異なり、信州善光寺より便あるに、彼國にても紅梅彼岸櫻など花咲候由、

〔古今著聞集草木〕草木者有時以昔伊弉諾伊弉冊尊既生木祖句々迺馳次生草野姬於戲春有櫻梅桃李之花、秋有紅蘭紫菊之花、皆是錦繡之色、酷烈之匂也、然而昨開今落、遲速雖異、隨風任露、變衰不遁似樂有爲可觀無常矣、

〔徒然草下〕花のさかりは冬至より百五十日とも、時正の後七日ともいへど、立春より七十五日おはやうたがはず、

〔和漢朗詠集春〕早春

東岸西岸之柳、遲速不同、南枝北枝之梅、開落已異、形序、逐地保胤、

〔橘庵漫筆〕花は枝毎に陰處より花開けり、南枝花初て開くと云は理の屈にして差へり、唯一理に葛藤せらるれば古人の糟粕を嘗て聲に吼る徒となり、無見識の域を出がたし、殊に梅は就中北枝陰所よりひらく物なり、陸務觀が北枝の吟思ひあたれるかな、

〔花月草紙五〕花のちるは、うてなのうちの實のおほきやかになりて、はなびらの居どころなき故にちるなり、この雨に花はちりぬといふは、雨のうるほひにて、かの實の大きくなればなり、秋冬に至りて、葉の落つるは、わかめのくきのうらよりめぐみて、そのわかめの大きくなれば、ふるき葉の居どころなけれども、ちるなりけり、

〔古今著聞集草木〕同御時○順内裏にて花あはせ有けり、人々めんくに風流をほどこして、花奉りけるに、非藏人孝時、大きなる櫻の枝を兩三人してかせて、南殿の池のはたにほりたてたり